

芹沢長介著・芹沢銈介装幀

『石器時代の日本』出版の思い出

芹沢恵子

美術工芸館5Fエレベーターの扉が開くと、目の前の陳列ケースに、それは丁寧に展示されている。いつもの展示室のワン・シーンである。著者は芹沢長介、装幀は父の銈介、そして私も少なからず出版にかかわって、三者で完成させたともいえる、渾身の一冊である。

出版元、築地書館の一室で、熱心な館主の土井庄一郎氏も加わって原稿を揃え、写真や図版を選んだことを、きのうのこのように思い出せる。今、函の背表紙に貼り付けられた小さな泥岩製の勾玉（未成品）は、そのような時に「これ、いいね。」と選ばれた、私が撮影した写真である。大変嬉しかったことを覚えている。本文中には、亀が岡式土器の実測図や拓本、原稿も多く取り上げてもらえた。これらは、卒業時の学部と修士論文の一部であった。



『石器時代の日本』という考古学の専門書に、「馬淵川のほとり」なる私の「岩手県雨滝遺跡調査日録」を載せることを提案された時は、そぐわないのではと躊躇したが、むずかしい専門書でありながら、芹沢長介のやわらかな解説の語り口に違和感なく私の発掘日誌はおさまって、安堵した。

遺跡の発掘は北から南まで数多く参加したが、本文中に報告された雨滝遺跡は、土器や石器、土偶、岩版など出土遺跡の豊富さとともに、忘れられない最高の遺跡であった。

考古学ひと筋に研究を続けて来た長い道のりは、この『石器時代の日本』にひとつの到達点を記せたように考えられる。

思い起こせば、私は小さい頃から古びた雰囲気が好みであった。中学時代の北鎌倉では、通学路が寺院の境内だった。高校に入学した或る時、考古学者・和島誠一先生の刺激的な講演に接し、古墳に強く興味を持つようになる。思いは高じて、古墳研究の権威・後藤守一先生のもとへと、明大の門をたたいたのであった。

当時、明大考古学研究室は活気にあふれ、芹沢長介を中心に、未知の時代への研究が意欲的に推し進められていた。私の考古学の興味は、古墳から、次第に縄文時代へと向かってゆく。研究者への道のりの始まりであった。

やがて時代を経て、その途上に、『石器時代の日本』の出版は遂行されたのである。わが人生の、記念すべき最高の一冊であった。

〔写真〕

芹沢長介著・芹沢銈介装幀

『石器時代の日本』

(築地書館 一九六〇年六月)

芹沢銈介装幀(文字デザイン・写真レイアウト)

函・表紙：遮光器土偶(縄文時代晩期)

函・背表紙：泥岩製勾玉(縄文時代晩期・岩手県雨滝)

函・裏表紙：香炉型土器(縄文時代中期・長野県井戸尻)